



Data

監督・脚本：賈樟柯（ジャ・ジャンクー）

出演：趙濤（チャオ・タオ）／廖凡（リャオ・ファン）／徐崢（シュー・ジェン）／冏亦男（デアオ・イーナン）／馮小剛（フォン・シャオガン）／張一白（チャン・イーバイ）梁嘉艷（キャスパー・リヤン）

👁️👁️ みどころ

本作は大同、奉節、新疆ウルムチを舞台とし、激動する中国の2001年からの17年間も変わらぬ想いを抱えた女と男がすれ違う物語。したがって、『帰れない二人』の邦題もいいが、原題の『江湖儿女』も、その意味をしっかりと勉強したい。

日本で“渡世人”と言えば鶴田浩二や高倉健、そして藤純子だが、21世紀の中国に渡世人がいたの？また、バブル時代の『YOUNG MAN』や『CHA-CHA-CHA』が、なぜ大同のディスコで鳴り響いているの？ジャ・ジャンクー監督によると、それこそが21世紀の中国らしい。したがって、そこで生きる若者や渡世人たちの生きざまは？

17年も経てば人は変わるもの。しかして、本作に見る渡世人と女渡世人の変化は？その中でのヒロインの移動距離は7700kmというから、恐れ入る。移ろいゆく景色、街、心。それでも愛し続ける二人の男女の姿を描く、第五世代監督の旗手・ジャ・ジャンクー監督の最新作は必見！

—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*—————*

■□■邦題もいいが、本作の理解には原題もしっかりと！■□■

本作の邦題は『帰れない二人』だが、原題は『江湖儿女』。この江と湖は、川と湖、儿と女は男と女（息子たちと娘たち）の意味だ。パンフレットにあるジャ・ジャンクー監督の「ディレクターズ・ノート」では、まずこの原題『江湖儿女』の意味を詳しく解説してくれているので、これは必読！ここでは、「江湖」は“川と湖”という文字以上の意味があり、言葉にするのは難しいのですが、“真に危険な世界”“激しい感情の世界”をも表しま

す。この二語を組み合わせると、世間の流れに逆らおうとする人々、優しさと敵意、愛と憎しみによって生きる人々を想起させます。」とジャ・ジャンクー監督自らが解説している。なるほど、なるほど。

そんな原題に対して、邦題の『帰れない二人』は、ジャ・ジャンクー監督が言う「複雑で意味深な中国語」を正確な日本語に翻訳することを諦め、完全に意識したもの。つまり、別れと再会を繰り返しながら今があるヒロインのチャオ（チャオ・タオ）と、その恋人のビン（リャオ・ファン）の2人が、もう一度昔に戻りたいと思うものの、それは到底かなわないという気持ちをストレートに表現したものだ。『帰れない二人』とは、その切ない気持ちがよく伝わるなかなかいい邦題だが、奥行き深い本作をホントに理解するためには、原題の意味を中国語の勉強を含めて、しっかり噛みしめる必要がある。

■□■本作が描く激動の21世紀中国は、私が見た中国と同じ■□■

パンフレットによれば、本作が描くイントロダクションのポイントは、「移ろいゆく景色、街、心。それでも、愛し続ける。総移動距離7,700km!現代中国を背景に描き出す、17年におよぶ愛の物語」。そして、ストーリーのポイントは「激動の21世紀中国。北京五輪開催決定、三峡ダム完成、経済の急成長・・・変わりゆく17年の月日の中で、変わらぬ想いを抱えた女と男がすれ違う。」とされている。

私の生まれは中華人民共和国が誕生した年と同じ1949年。そして、中国旅行にはじめて行き、中国との接点が生まれたのが2000年8月だから、本作のストーリーが始まるのとはほぼ同時期だ。本作は大きく①2001年、山西省・大同（ダートン）、②2006年、長江・三峡、奉節（フォンジェ）、③2017年、大同という3つの時代に分けて、17年間に及ぶチャオとビンの愛の物語が描かれる。ジャ・ジャンクー監督の映画の舞台には必ず彼の出身地である山西省の大同が使われるが、私が最初に知り合った中国人留学生の女性の出身地も、山西省の省都・太原だった。それから、2019年9月までの20年弱の間、私の中国との接点は急速に広がっていったから、本作のストーリーのポイントとなる、激動の21世紀中国の①、②、③の時代における3つの出来事は、私が見た激動の中国と同じだ。

ちなみに、本作前半では、ビンが使う“渡世人”と言う言葉が珍しいうえ、後半からはチャオがその言葉を受け継いでいくところが面白い。“渡世人”と言えば、鶴田浩二、高倉健のヤクザ映画、任侠映画を思い出すし、“女渡世人”と言えば、緋牡丹お竜の藤純子や、女ツボ振りの江波杏子を思い出すが、激動の21世紀中国にホントに渡世人や女渡世人がいたの・・・？

■□■『青の稲妻』と『長江哀歌』を是非一緒に！■□■

ジャ・ジャンクー監督のミュージズはチャオ・タオだが、私とそのチャオ・タオをはじめ

て観たのは『青の稲妻』(02年)を観た時。同作は、2001年の山西省の地方都市・大同を舞台に、揺れ動く19歳の男女を主人公として描いた話題作。『任逍遥』を歌い、アメリカばりの反体制(?)を気どる若者たちが行きつく先を、何ともやり切れない無力感の中で描いていた(『シネマ5』343頁)。

同作で、「モンゴル王酒」のキャンペーンで踊っていたモデルの女の子がチャオ・タオだが、彼女は最後にはアメリカ映画で観たような銀行強盗に走る2人の19歳の主人公らと共に、何とも言えない存在感を見せていた。当時19歳だった同作の主人公たちは、その後どうなったの・・・?

他方、三峡ダム建設によって水の中に消えていくまちや人々の姿を、長江の流れと共に描いた映画はたくさんあるが、ジャ・ジャンクー監督は最もそれに注目してきた映画監督。そんな彼の『長江哀歌』(06年)は、第63回ベネチア国際映画祭でグランプリを受賞した名作で、その舞台は古都・奉節だった。同作の主人公の1人は、16年前に別れた妻・妹を探すため、奉節にやって来た山西省の炭鉱労働者・韓三明の物語。もう1人の主人公は、同じく山西省から、2年間音信不通となっている夫・郭斌を探すため奉節にやって来た沈紅だ。つまり、ジャ・ジャンクー監督は、全く無関係な三明の物語と沈紅の物語を、同じ奉節を舞台として展開させていくことによって、三峡ダム建設で沈んでいくまちにおける人間の営みのはかなさを描いたわけだ(『シネマ17』283頁)。

ここでは、古来より山水画の題材として描かれてきた壮大な長江の風景と、三国志に登場する白帝城が大きなポイントになっていた。本作のヒロインであるチャオが刑務所での5年間の服役を終えた後に訪れたのが、三峡ダム建設のために水没するまち・奉節だが、それは何のため? ゆったりと流れる長江が大きく映し出されるスクリーン上では、「三峡ダムの水位が上昇します。数年後、三峡へ訪問する頃には、景色の一部は山底の遺産でしょう」という観光アナウンスが響いていたが、それってホントにホント・・・?

本作は、『青の稲妻』に登場した19歳の若い恋人たちと、『長江哀歌』に登場した韓三明と沈紅の、その後を追うかのように描いた3部作になっている。と言っても、もちろん『青の稲妻』のチャオ・タオと、『長江哀歌』のチャオ・タオと、本作のチャオ・タオが同一人物だという訳ではなく、激動の21世紀中国で、2001年大同、2006年奉節、2017年大同を舞台に生きたチャオと、その恋人ビンとの愛の遍歴を描くものだ。したがって、本作を鑑賞するについては、是非『青の稲妻』と『長江哀歌』も一緒に鑑賞したい。

■大同・奉節VS新疆のウルムチ、その位置は?距離は?■

近時、中国では、SF小説とSF映画が大ヒットしている。その代表が『流浪地球』と『三体』だ。そんな最先端の流行を予測するかのように(?)、本作中盤では、ビンと再会するために訪れた奉節で、ビンと別れることになり、もはや故郷の大同に戻れないチャオ

が、汽車の中で出会った怪しげな学者風の男（シュー・ジェン）から、UFOの話を書く面白いシーケンスが登場する。この男の話によれば、新疆のウルムチは、改革開放政策が始まった時の深圳と同じように、活気と可能性に溢れた都市。そこにあるUFOの研究所で働けば、メチャ面白いそうだ。もっとも、5年間の服役を終えて会いに来たのに、ビンから振られ、今や百戦錬磨の女渡世人に成長した（？）チャオが、そんな話にコロリと騙されるはずはないが、チャオがそんな詐欺師ミエミエの男と一緒に新疆行の列車に乗ったのは一体なぜ？列車の洗面所の中で交わす2人の抱擁を見ていると、ひょっとしてこのままベッドイン？そんな予感もあったが、さすがにそこまで至らなかったのは幸いだった。

新疆にあるウルムチはかつてのシルクロードの都市で、中国の最西部にある都市。本作は17年に及ぶチャオとビンの愛の物語だが、同時に移動距離が7700kmだから、すごい。そのまま列車に乗って行けば、奉節から広東に行くはずだったチャオは、広東ではなくウルムチに到着するわけだが、ある駅でチャオは、男が眠っている間に1人降りてしまったから、アレレ……。しかして、それは一体なぜ？

前述した「ディレクターズ・ノート」では、ジャ・ジャンクー監督は「たどり着けない場所」という見出しで「中国の北西部奥地の新疆のウルムチ、チャオが『帰れない二人』の中で決してたどり着けない場所です。おそらく誰にでもそのような、決してたどり着けない場所があると思います。距離の問題だけではなく、新しい人生を送ることはとても難しい。愛や記憶、習慣といった感情の束縛から逃れられないのです。それでも自由になろうともがく時、その結果はその人の尊厳を反映するものになります。」と述べているので、それに注目したい。つまり、“江湖”は、いくら危険な世界、激しい感情の世界であっても、ビンとチャオという“儿女”にとつてたどり着ける場所だが、新疆のウルムチは、チャオにとつて決してたどり着けない場所というわけだ。中国大陸はメチャ広いから、その地理を頭に入れるのは大変だが、本作を理解するためには、大同と奉節の位置関係、さらには、決してたどり着けない場所としての新疆ウルムチとの位置関係をしっかり理解したい。

■□■あの“渡世人”も今や車椅子姿に！2人の再会は？■□■

刁亦男（ディアオ・イーナン）監督の『薄氷の殺人』（14年）は、中国映画には珍しいフィルムノワール調のミステリー作品で、第64回ベルリン国際映画祭で作品賞と主演男優賞の2冠を獲得した名作。原題を『白日焰火』（直訳すれば「白昼の花火」とする同作では、廃墟ビルの屋上から打ち上げられる大量の白昼の花火のシーンが圧巻だった（『シネマ35』65頁）。

そんな同作で、落ちぶれ果てた元刑事役を演じた廖凡（リャオ・ファン）が、本作導入部ではカッコ良い渡世人のビン役を演じている。しかし、ビンが仲間たちから一目置かれ、兄貴分的な存在で、仁義の世界で義侠心を重んじながらのし上がろうとしているカッコイ

イ渡世人でいるのは導入部だけだ。ある日、チャオを乗せたビンの車が若いチンピラに囲まれ、「お前すごいんだろ！冠くてやるよ！」と襲われると、得意の格闘ワザで健闘したものの、多勢に無勢、そして武器を持つ者と持たざる者との差で、ピンはボコボコにされてしまったが、それを救ったのがチャオの拳銃だ。いくら天に向かって撃っただけとはいえ、これにモロに対抗すれば、自分の身体に風穴があくかもしれないと悟ったチンピラたちはそこで解散したから、ピンは一命を取り留めることに。しかも、銃の不法所持を警察から咎められたチャオは、それをピンからもらったことを自白しなかったから、ピンは1年で刑務所から出られたのに対し、チャオは5年間も服役することになったわけだ。そのため、チャオは当然、自分が出所する時には、先に出所したピンが出迎えにくるものと思っていたが・・・。

2006年に、ピンを探すため奉節にやって来たチャオを避けようとするビンの姿は、いかにもカッコ悪い。この時ピンは、仕事仲間だった男の妹と「いい仲」になっていたから、それもやむなしだが、それならそれで男らしく“FACE TO FACE”でチャオにきちんと説明（釈明）すべきでは・・・？それはともかく、本作を観ていると、男女の仲がいかにも難しいかがよくわかる。そして、男も女も渡世人ともなれば、それはなおさら・・・。しかして、後ろ髪をひかれながら、ピンとチャオは奉節で別れ、チャオはいったんは新疆のウルムチに向かう羽目にもなったのだが、さて、それから11年後の2017年の今は・・・？

ここでは、あの羽振りのよかった渡世人のピンが車椅子姿になっていたから、その落ぶれぶりにビックリ！今や2人とも中年おじさんと中年おばさんになっているのは仕方ないが、すれ違い続けた2人が今また大同で再会することになったのは、一体なぜ？

■本作から考える、主人公たちの17年VS私の17年■

本作は2001年から始まるピンとチャオの物語だが、その最初の舞台は大同。渡世人のピンは恋人のチャオを側に従えて、雀荘の中で羽振りが良さそうだ。また、日本の1990年代を彷彿させるディスコ音楽が鳴り響く大ホールの中で、腰をくねらせ、長い髪をなびかせながら踊り狂っている男女の姿にビックリ！北京、上海、深圳ならわかるが、山西省のまち・大同でもこんな風景があったとは！しかも、そこで鳴っているのは、西城秀樹の『YOUNG MAN』や石井明美の『CHA-CHA-CHA』等のダンス音楽だから、なおさらビックリ。思わず椅子の上でリズムを取ってしまったほどだ。この時の2人の歳は30～40代。私が念願の自社ビルを購入するとともに、そこから歩いて2、3分のバカ広いマンションを購入したのも2001年。同時に、その頃に私と中国との接点が始まったから、私の弁護士としての第2の歩みも2001年に始まったことになる。その時の私は、おおむね50歳だ。

それから17年、本作の主人公の1人である、不器用な渡世人のピンは無様な車椅子の

姿となり、チャオの助けがなければ何もできない状態になっていた。しかし、故郷の大同に戻ってきた女渡世人のチャオは元気いっぱい。2001年当時が30歳だとすれば、今は50歳近いわけだが、その生命力はふつふつとたぎっているし、従業員たちの仕切り方もハンパではない。しかも、肉体以上に心まで弱くなっているビンに対するリハビリ支援のハッパのかけ方を見ていると、その厳しさは相当なものだ。そんな姿を見ていると、不器用な男ビンは、激動の21世紀中国の17年間をうまく渡っていけなかったのに対し、5年間の服役まで体験した前科モノで女渡世人のチャオは、時代の変化にそれなりに対応してたくましく生き抜いていることがよくわかる。

さあ、それに対して、同じ時期の私の17年後は？そして、同じ時期の日本の17年後は？私は2015年の大腸ガン、2016年の胃ガンの手術を経て、2019年の今70歳になったが、多くの“価値観の転換”を経て、今もそれなりに器用に生きている。その点、不器用なビンとは大違いで、時代の変化への対応力はバッチリ。しかし、バブルが崩壊する中で成立した「土地基本法」の威力(?)や、不動産融資の総量規制という金融政策を断行したことによって、さしもの日本の土地バブルが崩壊したのは良かったが、それによる経済不況と「失われた10年」と呼ばれる時代の発生は日本国民には想定外だった。そのため、30年間続いた平成の時代の後半となる2001～2018年の日本は、小泉内閣の登場にもかかわらず、基本的には“低迷の時代”となった。これは、少子高齢化が急速に進む構造になっている日本では止むを得ない現象かもしれないが、それを、その間の中国の劇的な変化(成長)と比べてみれば・・・？

ジャ・ジャンクー監督が、2001～2018年までの21世紀中国の激動の17年間を、ビンとチャオを通じて鳥瞰的に描いた本作は実に興味深い。それは描く側の視点が明確になっているからだが、それ以上に大切なのは、そんな対象(客体)が存在していたこと。そんな本作の鑑賞を、私はすべての日本の映画ファンにおすすめしたい。そして、ジャ・ジャンクー監督が本作で描いた2001年からの激動する中国の17年間と、自分の人生のそれを比較してもらいたい。その結果、現在のビンのようなみじめな姿があるの？それとも、チャオのように今もたくましく生きる姿があるの・・・？

2019(令和元)年9月27日記